

桶種類

ゆ津輕秋田邊にては、榎の木の皮の様に見ゆるものを曲て、樺にてとち、桶として用ゆ、又太き木をくりぬきたるも見ゆ、邊土は人民にいとま多きゆへ、丁寧なる細工をしても用は足りぬにや、  
〔鶉衣拾遺中〕岐岨路紀行 延享二年

十四日四大井にとまる、山中はたえて竹のなき所にて、桶の籐などいふ物も木にて營めり、

〔我おもしろ上〕籐かけ替たる手桶の水もりければ、下部が策のやうなりとつぶやくを聞て、大學のをしへによるかそのたがはざるに近しといふをきくにも

〔續古事談二〕大入道殿藤原家攝政ニオハシケル時、法住寺ノオト藤原ヨリハジメテ、オホ

クノ上達部一種物ヲグシテマキリアツマリ給ケリ中一條大將藤原ハ銀ノ鮫鮎ノ桶ニ、ア

ユヲヲリビツニ入テイラレタリ、

〔源平盛衰記四十二〕金仙寺觀音講附六條北政所使逢義經事

軍兵縁ノ際マデ打寄テ、御堂ノ内ニ下居テ、我物ガホニ講ノ座ニ著ス、五種御菜ニ三升盛ヲ百二

三十前許組調タリ、座ニ杯居ス大桶ニ汁入、樽ニ濁酒入テ座中ニ昇居タリ、

〔日本永代藏六〕銀のなる木は門口の柵

山家へ毎日賣ぬる味噌を、いづれにても小桶俵を拵へ、此費かぎりなし下

〔後は昔物語〕おまん鮮は寶曆の頃よりと覺ゆ中鮮賣といふは、丸き桶の薄きに、古き傘の紙を

ふたにしていくつも重ねて、鮮た調の鮮とて賣ありきしは、數日漬たる古鮮也、  
ぬりりをけ

〔後奈良院御撰何曾〕何も漆のあるとき

〔毛吹草三〕大和 塗桶

〔皇都午睡三編上〕上方にて買かて來るを、江戸にては買かて來る中片手桶をさるば、

〔令義解五〕凡兵士中每五十人中水甕一口、鹽甕一口中皆令自備、